

職種間によるFIM点数差軽減を目指して



発表 6分 質疑応答 2分

2017/2/11 8:30~9:50 第4会場

医療法人 凌雲会 稲次整形外科病院 1)

独立行政法人 国立病院機構 徳島病院 2)

○日浅拓也¹⁾ 稲次正敬¹⁾ 湊省¹⁾ 稲次圭¹⁾ 稲次美樹子¹⁾
高田信二郎²⁾



INATSUGI
ORTHOPAEDIC
HOSPITAL

<はじめに①>

平成28年4月の診療報酬改定により回復期リハビリテーション病棟（以下回リハ病棟）にもアウトカムが機能的自立度評価表（以下FIM）で求められるようになった。

そのため、看護部とリハビリテーション部（以下リハ部）のFIM採点における解釈の統一とその精度が求められる。



<はじめに②>

加えて両部間の採点点数の開きは、適切な介助を行う上での障害因子ともなり得る。

そこで、当院で以前から問題になっていた看護部とリハ部のFIM点数の差を軽減させるための取り組みとその成果を以下に報告する。



<方法①>

平成28年7月から

- ①毎日 リハ部に対してFIM 1問1答
- ②看護部、入院リハ部への月1回FIMテスト
- ③入院患者カンファレンス時に日常生活動作
(以下ADL)情報等の共有

を実施した。



INATSUGI
ORTHOPAEDIC
HOSPITAL

<方法②>

取り組み前の平成28年5～6月の2ヶ月、
取り組み後の平成28年7～8月、及び8～9月の
それぞれ2ヶ月間に回りハ病棟を退棟した患者に
対して看護部とリハ部それぞれで採点した退院時
FIM点数差を比較し、その成果を検証した。



<対象>

職員

看護部：61名

リハ部：29名

計 90名

患者

5～6月退院者：61名

7～8月退院者：47名

8～9月退院者：51名

計 延べ159名



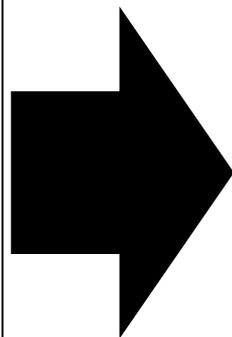
INATSUGI
ORTHOPAEDIC
HOSPITAL

<内容①>

毎日FIMの一問一答

食事1

配膳はできない
食事形態は普通食
スプーン、フォークを使用すれば、食事摂取可能であるが
箸を使用するの食事は困難



食事1

7点

配膳、下膳は採点に含まれない
スプーン、フォークは自助具ではなくそれだけで減点対象にならない。



INATSUGI
ORTHOPAEDIC
HOSPITAL

<内容②>

看護部、入院リハ部への月1回FIMテスト

項目	配点	活動内容
セルフケア		配膳は全介助でもらいます。口の体操を食前にします。エプロンは着けてもらいます。きざみ食の提供です。食べ残したものはかき集めてもらいます。自分で噛んで、嚥下は誤嚥なくできています。スプーンを持って自分で食べ物を口まで運ぶことができますが、口周囲筋の麻痺があり左口角から食べ物をよくこぼします。水分は必ずと言っていいほどこぼれ、いつもティッシュが必要です。こぼれたもの、口元は自分で拭くことができず介助で拭いてもらいます。
		歯磨きは、歯磨き粉をつけると自分で磨けます。コップは自分で持てず、介助者が口まで運んであげます。口の滯りは口角から水がこぼれて常に洗面台に顔を載せていないとこぼれてしまいます。整髪は全介助です。手洗いは洗面台に連れて行くと蛇口を開け、非麻痺手を洗うことができます。麻痺手は洗っていません。洗顔は蒸しタオルを準備して渡すと自分で拭くことができます。
		石鹸のついたスポンジを渡すと麻痺側上肢は自分で洗いますがそれ以外は自分で洗おうとしません。体を拭く作業は全介助です。
		前開きのシャツを着ます。前開きのシャツは、留めがボタンではなく、マジックテープになっていれば留めることができます。マジックテープ用の市販の服を常に揃えています。服を見せて着替えるジェスチャーをすれば着替えをしようします。着替える服は準備をしてあげることが必要です。麻痺側上肢と背中に回す動作に介助が必要です。
		背もたれのある椅子がないとパンツ・スポンをはく時にバランスを崩して後方に転倒してしまいます。スポン・パンツ共に足を通すのには介助を要します。引き揚げは自分でできますが、お尻まで引き上げる時は再び介助が必要です。靴下は全介助です。靴はいつもかかとを踏んでいます。それで移乗しています。それで転倒はありません。
		スポンの上げ下げは自分でできます。太ももまで下ろしますがあとは介助者が下ろします。陰部清拭はトイレットペーパーを介助者が巻き取って渡すと自分で拭くことができます。
排泄		尿パッドを使用を使用していますが、失敗はありません。膀胱抗痙攣剤を使用していますが服薬管理はすべて看護師が行っています。
		軟便剤を飲んでいますが、軟便剤の管理はすべて看護師が行っています。失敗はありません。

<内容③>

入院カンファレンス時にADL情報を共有



INATSUGI
ORTHOPAEDIC
HOSPITAL

○以前から実施していた事

ピクトグラム表

トイレ動作のズボン・パンツを降ろす、拭く、ズボン・パンツを上げる動作をFIM点数化して記載している



INATSUGI
ORTHOPAEDIC
HOSPITAL

<統計>

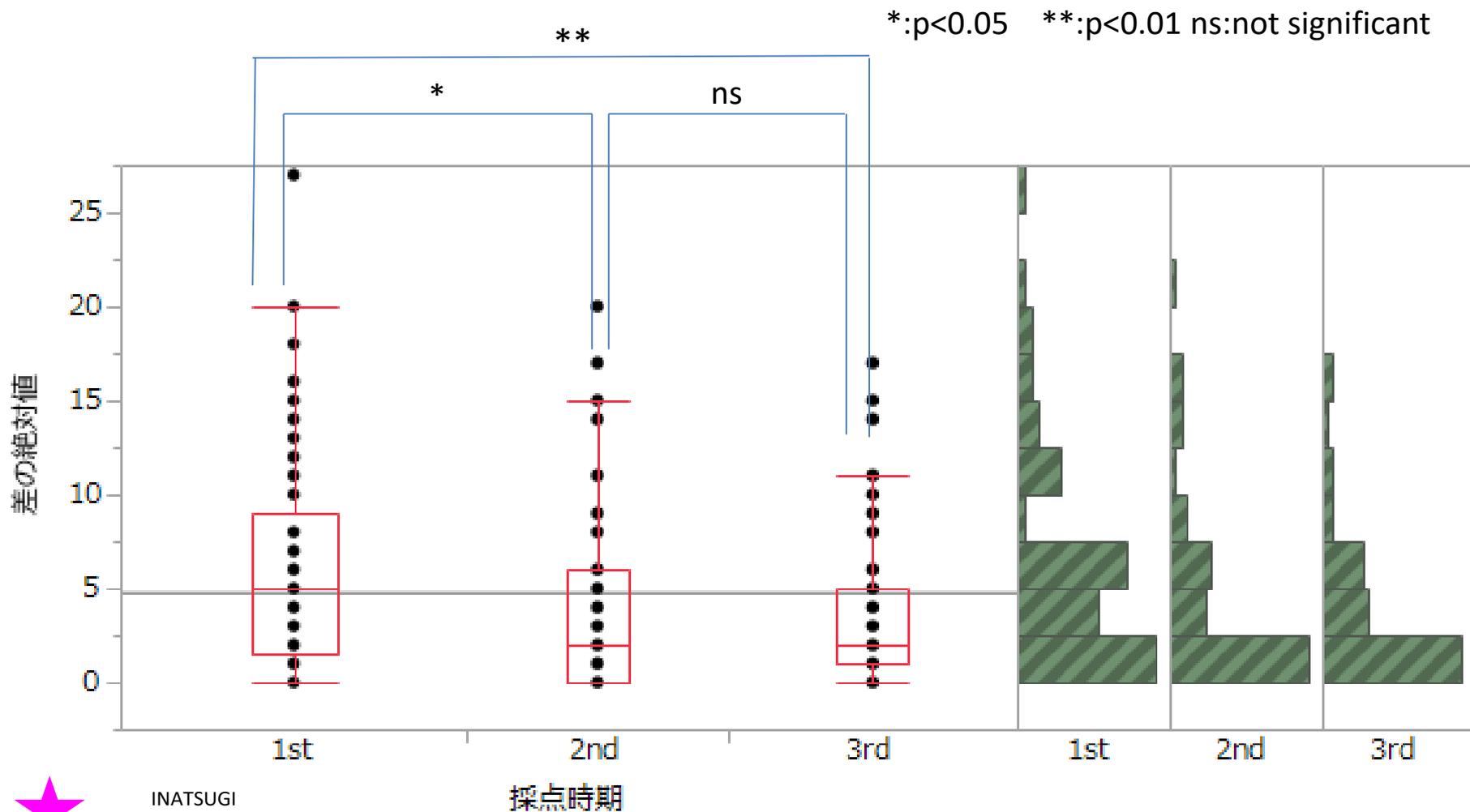
- 1st群 : 平成28年5～6月 採点(取組み前)
- 2nd群 : 平成28年7～8月 採点(取組後1)
- 3rd群 : 平成28年8～9月 採点(取組後2)

1st群と2nd群、1st群と2nd群における、看護とリハ部各職員が採点したFIMの差の絶対値を Mann-Whitney検定において分析した。

統計解析にはJMP12. 2を使用した。



< 取り組み前後における看護・リハFIM採点の差の推移 >



INATSUGI
ORTHOPAEDIC
HOSPITAL

<結果>

取り組み前・後の比較では、看護部、リハ部のFIM点数差が有意に縮小していた。

7～8月、8～9月の間には有意な差は認められなかった。



< 考察① >

今回の取り組みによって、1日を通してのFIM点数確認、FIM点数内訳を明確にし、職種間でのFIM採点の差が縮小し、視点や解釈の統一が図られ、アウトカムに対する信憑性が上がったと感じる。



< 考察② >

看護部、リハ部とFIM点数のコミュニケーションが取れるようになったことによって、その他の介助方法や支援方法など他のコミュニケーションを取るようにもなり、以前よりもより質の高い医療が提供できるようになったと思われる。



<まとめ>

FIM点数差は軽減しているとはいえ、同点数までは至っておらず、今後は今以上に連携を密にとる、早期社会復帰、自宅復帰が可能となるようにしていきたい。



INATSUGI
ORTHOPAEDIC
HOSPITAL

<今後の展望>

- ① FIM項目内でもどの項目の点数差が大きいか検討
- ② 各職種間でFIMマスター称号を付与し、他スタッフへの指導

